

碓氷親子の視えない段差
昆布+



「碓氷君今日も頼むよ。」

そういつてパンツ越しに勃起したイチモツを見せる社長

碓氷は逆らえない。

今の地位は社長との関係で生まれたものだからだ。



「《いつも奥さんにしてもらう様に》ってアドバイスをしてから本当に上手くなった。」

「碓氷君の奥さんは口上手(笑)なんだね。ははは。」とイチモツを啜えた碓氷にむけて満足そうに社長は言った。





社長のキスはねちっこくてタバコ臭くてとても不快だった。
だが今ではそのキスで興奮してしまうほどに

自分の身体はもう《社長の為の身体》になってしまっていた。

「ほう…尻だけでイけるようになったのか…いいねえ。
碓氷君のような優秀な社員が持てて私は嬉しいよ。」

そう言って社長は碓氷の中に容赦なく精液を吐き出した。



「啜える碓氷！しってるだろ？
お前の父ちゃんが働いてる会社の社長が
オレの父ちゃんなんだ……！」

「だから……逆らったらどうなるかわかるよな……？」



仕事帰りの夜に社長から送られてきた
自分の息子が写る画像を見て

自分の中にある《大切な何か》が壊れてしまった。



「お父さん、お父さん」と息子は呼び続けます。
助けを呼ぶその声に父親が応えることはありません。

なぜなら息子を苦しめているのは

まさに自身に挿入されている
《父親のイチモツ》なのだから……めでたしめでたし。





















